中林経城詩集『鉱脈の所在』
現代世界にひろがるみずみずしい新古典詩精神

佐相　憲一

〈「私」は鉱脈、そして「ぼく」、「あなた」。地球物質精神が存在の奥深くへと案内する。歴史・自然界を見渡しながら、生を見つめる。独自の手法で何重にも映し出されてひろがる詩情。まさにこの第一詩集自体が光る鉱脈だ。〉

詩集の宣伝にそう書いた。編集をしながら何度も何度もこの詩群を読み、独特の味わいに完全に魅了された。「新鋭こころ」にふさわしい、類まれな個性の出現と言えよう。

この詩集では作者の自我が広範囲に他者と混じりあって地球物質精神や歴史的な時空の声となったり、作者個人の声となったり、変幻自在に飛翔している。だから、個々の箇所のさまざまな人称〈私〉〈ぼく〉〈あなた〉〈きみ〉に具体的な誰かを想定して読む必要はない。さまざまなこころが交錯しながら世界と存在の本質的なところへ降りて行って、あるいは飛んで行って、外界と内面を展開していくのである。科学的でありながら古典的、遍在するこころの風景と世界の歴史の記憶である。夢のような不思議な展開に世界の現実があって、人の思いもある。

詩集は序詩「鉱脈」で始まる。〈待つてゐる　それは〉というきなりの倒置法が強い関心をひく。〈周到に擬装を凝らした岩塊から／仮借のない鶴嘴に／掘り起こされる／その時を／／銀色に流れるあの峡谷の／絶壁を打ち割って聳える老松の／水底か根底か〉という鉱山の鉱脈・鉱石の様子が、三連目の〈いまあなたも／断崖に臨むやうに／無防備になつた魂で／自然の底の底を覗くなら〉の飛躍で一気に別の視野も伴っていくのである。つまり、鉱山の描写が同時に人間関係の何かも暗示しており、その詩的な含意の幅はすでに詩人の複眼を感じさせる。終連〈見える／あの鉱脈の中に憑依して／危険なほど緊密な／結晶になつた／私が〉。最後の一行でまたはっとさせられ、ニヤリとさせられる。この詩は、自然界における鉱脈の所在を鉱石という物質としての〈私〉からリアルに描いていると同時に、生身の悩める人間の何らかの関係としての心理描写でもあるのだ。

Ⅰ部は「蝶にいざなはれて」。作品「おとづれ」。〈深夜／ひとりでに開いた／ぼくの部屋の／顕世と幽世をへだてる扉／その指二本分の隙間から／出入りする／蝶／／その顔には／なつかしいものの面影／／鍵をひとつ／机の上に落として／去つてゆく／／そこに何か／眠つてゐるらしい／丘の方へと。〉

案内役が蝶だとは魅惑的で鮮やかだ。こころの丘やなつかしいものは読者諸氏にもそれぞれあるだろう。生と死の境を越えて、現実と夢の接するところを開いて、存在は世界と内面のフィールドへ旅立ったのである。

ここから数篇、木が森になり、さらに奥へ、荒地に着き、蝶と共に海に出て、鳥の声を聞き、海草、貝殻などを見つめながら、いつしか異国に渡っているのであった。

ロシアのユダヤ自治州にまで飛んで行ったとは。いよいよ存在は人類の歴史を感受する。さりげなく詩集は近現代史の問題へと迫って行く。続いてアムール川の「イワノフカ」では、ソ連軍の日本兵へのシベリア抑留よりも前の時代、一九一九年にロシア革命に干渉して侵略した日本軍による住民虐殺という、日本人が忘れがちなところに焦点を当てる。視点は被害者の側に立ってリアルに淡々と描きながら、彼らの気持ちがとてもよく出ている。日本古典文学を現代に受け継ぐ新抒情詩人はここで厳しい批評眼を見せてくれる。

そのような悲しい歴史を背負って、自然の中の精神と化した旅は、続く数篇でまた詩情豊かな刻印をしていく。〈北方の静けさ〉の次はインドへと飛び、夢幻の逍遥を経た後、バオバブのある「大陸の夢」へとたどり着く。ここでも、他者となったこころには戦争の影がある。そして今度は仏教の世界へと分け入って行き、〈千年前のぼくの口述を綴った〉〈黒い線文字〉へ。謎めいた「禁区」を経て、存在は「廃市」の港町の夕暮れへと到着した。〈そして絶ち切られた現実を／若々しい詩で埋めてゆく〉。認識は前方の時間へと展望している。

Ⅰ部のラスト「徴」はここまでの精神的な世界の旅の総括のような詩であり、Ⅱ部の人生へとつながっていく詩でもある。

〈世界は一体になつて／私の泳ぎを受け入れた／生まれたてのこの海で／私たちみな／心から内化を遂げた〉

世界を自らの内面に取り込み、内側から見つめることを表現していて、詩的認識には力強ささえ感じられる。

Ⅱ部は「対岸から」。Ⅰ部の精神世界をふまえながらも、ここでは人生と人間の関係性に焦点が当てられている。冒頭の詩「対岸から」の一連目、〈対岸から町を眺めよ／あの慕はしい事物たちが／夕闇に拉し去られるその前に〉という詩句は、文字通りの意味のほかに、おのれの生い立ちからの人生のここまでを対岸すなわち客観的なところから見つめよ、というメッセージにも読める。そして、続く作品群で、自らの「記憶の道」を通る作者のこころが親しみをもってこちらにも響いてくるのだ。こどもの頃の若い母、通った校舎、友だち、青春で体験する「壁」、生き方をひたむきに追求しようとして悩む孤独感と救い。そして、Ⅰ部では蝶に案内されて世界へとひろがっていったこころが、今度は鳥と花の案内で恋などの経験へと近づいていくのであった。いっときはわかりあえたようなのに別れていく関係。悲嘆に暮れるのではなく、その情景もまた大切な世界の記憶であるとでも言うように、詩人は風物に心情を重ねて淡々と、しかしどこか哀切な響きで綴っていく。

Ⅱ部のラスト二篇「人生の印象」「記憶の岸辺」は、回想が総括されており、読者がそれぞれ自分の人生に引き寄せて読めるものとなっている。

Ⅲ部は「ことづて」。Ⅰ部・Ⅱ部を経て、しめくくりに総合されるような展開となる。「湖」に綴られている世界への精神の旅の契機には、Ⅰ部に共通なものがありながら、しかしすで

に主体としての自身の意思と行動がより強く出てきている。

次の「浚渫」は衝撃だ。ひろく旅をしながら、すでに峻別選択していかなければいけない人生と世界の厳しさを前に、〈無数の／言葉砂利〉を〈耳たぶ下の／観念廃棄場に／投げ棄てる〉のである。これは自己否定ではなく、自己選択、すすむべき道への思い切った自己批評であるだろう。このひたむきな姿勢に強く共感する向きも多いのではなかろうか。

それを受けるように、次の「尖端」はいっそう強いトーンで迫ってくる。〈長いあひだ／まつはり続けた一念が／つひにこの場所で／突きつけられたと思ふなら／きみも決断の時機を／もうはぐらかすな〉。ここの〈きみ〉には作者自身も含まれているような同時代社会のひろがりがある。作者はこのメッセージを自分自身への叱咤として書いたのかもしれない。しかし、力強い言葉は作者の意図をこえて、私たち一人一人の読者に励ましのニュアンスで伝わってくるのだ。詩集は鋭さの極限に到る。

ここからはまた優しい淡々とした抒情が戻ってきて、ほっとさせる。一見屈折した、しかし素直なこころの、悲しみと希望をはらんだ内面世界が、人生のみならず、またしても地球物質世界の本質と重なり合って進行していくのである。その視点が端的に表れているのが「近景」である。〈お前は／流れ寄る石の／ひとつひとつになるのだと／打ち棄てられたお前の苦悩も／砂粒の間へと／呑み込まれてゆくのだと／／黄金の魚が一匹／飛び跳ねた／大切な記憶のやうに／そつと開いた輪紋が／あなたを乗せて／遠い狭霧へと消えてゆく〉。ここには、否定に近いところまで降りて行きながら、大切なものの光で肯定へとつながる、この詩人の認識の弁証法がよく出ている。しかも、弁証法が抒情詩の中にあるという新鮮さがある。

こうして詩集はラスト三篇の力作「冬の体験」「庭」「ことづて」にたどり着く。「冬の体験」では、苦労の多い人の道で、それぞれのともしびを雪になぞらえて繊細にうたっている。「庭」では、作者は〈苔むした〉〈庭の一部〉になる。いったん突き放して落ち着いたところから見つめる人生と世界。そして、最後、「ことづて」にそっとこめられた願い。

〈その滴が
眼尻をすべり
見知らぬものの待つ闇へと
したたたり落ちるとき
あなたは気づく

諾ふやうに溶けてゆく襞の奥
花芯の先に残された
自分宛のことづてに〉

闇を知るからこその光。厳しい現実批評を経たからこその優しい抒情。文学好きにはたまらない流麗な文体の美しさ。新鮮な詩歌リズムとしての独自の内在律。作者の内省的な詩の言葉は、私たち読者それぞれの人生にも想像の翼をくれるようだ。

みずみずしい詩集をひっさげて突如私たちの前に現れたこの詩人は一九六九年生まれ。震災の仙台に暮らしている。

荒れて乾いた現代に、この深い詩世界を強くおすすめしたい。